

畫家の戰地觀察

《在金州黑田清輝氏の書信》

我邦に於ける新派油畫の誘導者たる黒田清輝氏は現に筆を載せて征清の軍に従ひ金州城下胡風雪を吹て山河一白の處に在り氏が佛國留學以來無二の朋友たる久米桂一郎、合田清兩氏の許へは屢々便りして彼地の摸様を報じ越せるに其眼光に反映する所は他と異なりて流石に畫家の觀察なりと覺へられ其文章は言文一致にして友垣の情交見ゆるが中に雅趣掬すべきものあり今先づ兩氏の許へ彼地の歲晩を報じ來れる客臘卅一日發の書信を掲ぐ

ぐつ／＼して居る内に早今年も今日限りと爲つた、君等は定めし何處かの牛屋か何かで年忘れをやらかす事なるべし、此處も馬鹿にはならぬぞ、軍司令部だとか何んとか云ふ役所あり、此處には門松が立つと云ふしやれよ、餅も少しは渡る様な話だ、酒は先日毎日を渡るので、山本(芳翠氏)杯大喜び毎日酔ばらつて居る氣樂な話ヨ、ウム實に氣樂と云點じや申分はない、別に何を何日迄しなくちやならないナドと云とは無く、明日何處に行くか知れぬ身だから、宵の内に明日する事を考へるにも及ばず、管理部から呉れるめしを食て、其日送りに暮らして居る、此頃はもう此金州の景色に目が慣れて、描て置度いと思ふ處が少なく爲つた、だが城外には随分いゝ處が澤山有るよ、もう少し暖かだといゝが、天氣は非常に好く、此時節に取りては極珍らしい暖かき、とは云ものゝ、廣い原につくなんとして畫でも描き始めると、指の先がつめたいやら何やらで、思ふ様にかけぬわい、燒土の様な、緑の色の少しもない野原の中に、土や石で作つた小屋が、三軒有つて、其縁を柳の様な木が四五

本、シヤツ、と生へて居るのだから、春に爲つて柳の芽が少し出た時なんぞには、實に面白い景色に爲るだらうと思はれるよ、

先日旅順に行つて、戦の有つた跡も見て歩いた時に、老蟻砦とか云ふ砲臺の中に在る營所で、ランテルヌに張て有つた畫(左圖)を一枚紀念の爲めに取て來たら、之れをお歳暮の印に君等に送つてやる、……

『毎日新聞』明治二八年一月二六日

明治二七年一月から翌年二月にかけて、黒田は日清戦争に画家として従軍した。明治二七年夏に始まった日清戦争だが、九月の平壤戦、黄海海戦で日本側が朝鮮半島を制圧、二月には旅順を攻略して遼東半島を占領するなど優位に戦況を進める中での従軍であった。黒田は二月四日に金州に到着し、翌一月一八日に威海衛攻撃に向けて出立するまで同地にて山本芳翠ら従軍画家や従軍記者らと生活を共にした。従軍の経過については、隈元謙次郎「黒田清輝と日清戦役」(『美術研究』八八、昭和十四年四月)を参照。



「ランテルヌに張て有つた畫」